



不登校の生徒を受け入れ、 学校に新しい風が吹く。 原点は中学校でのクラス運営

学校生活になじめない生徒に戸惑いながらも交流が生まれる

2022年度、本校は普通科にNewコースを設置しました。Newとは、“New Year New Me”という英語のフレーズからとったもの。心機一転という意味合いで、中学校時代、不登校気味だった生徒を受け入れる、あまり例のないコースです。県下全域の中学校を訪問し、108人の生徒や保護者と面談したうえで、初年度45人が入学しました。担当教員はその道の専門家。必修科目は2限目以降に設定し、自習用の別教室を設けるなど、学校生活になじみにくい生徒に対する配慮をしています。

最初は戸惑っていた新入生・在校生も、中庭を憩いの空間に整備したことで次第になじんでいきました。空気が変わったのはクラスマッチです。ソフトバレーボールで準優勝したことでNewコース生の印象が一変しました。また、同コースの保健委員が始めた清掃活動についての発表で、全校放送で流れた発言が反響を呼びました。「私たちは、褒められたいと思って活動しているわけではありません。松山学院が大好きだから掃除しているだけなので、それを見かけても妖精の魔法だと思っ

て放っておいてください」と。その瞬間、各教室から拍手が沸き起こりました。後日、清掃の様子を見た上級生が「ありがとう。一緒にやるよ」と声をかけている姿は感動的でした。

生徒の声も参考に4年で100近くのプロジェクトが進行中

私の教員人生は小学校から始まり、その後中学校に長く勤務しました。生徒から「クラスを引っ張る熱く面倒見のいい先生」と評され、学級運営に自信をもっていました。しかし30代の半ば、進学した生徒が「高校の教員はつまらん。何もしてくれない」と話すのを聞き、自分の過ちに気づきました。そして自律を促す見守り型の指導に変えました。不登校の生徒に深く関わり始めたのもこのころです。空き教室を居場所として開放し「困ったら言いこきて」というスタンス。「生徒に好き勝手させるな」と批判され、指導が空回りすることもありましたが、その子たちにとっては熱すぎず、距離を置く接し方が合っていました。保護者から信頼され、成績をぐんぐん伸ばす生徒もいました。その一方で、出席日数がネックとなり県内の高校に受け入れ先が見つからない無力さも味わいました。そんな心残りが、松山市教委での不登校対策

事業や、Newコース設置に繋がったのです。

副校長として本校に赴任したのは2021年。慣れない私立高校勤務で勉強の日々でした。教員面接だけでなく、県内の中学校に向向いては中学生と面談を重ねたのは前述の通りです。また、生徒が楽しく過ごせる学校にしようというトイレの改修に取り組みました。翌年校長に就任してからは、Green Gardenプロジェクト、キッチンカープロジェクトなど、大小あわせて4年で100近くのプロジェクトが進行中です。多くは生徒の声を拾ったもの。小中学校で担任として教室中に目を配っていた経験が生きているかもしれません。調理科ほか既存のコースの生徒の活躍に加え、Newコースの生徒が年々増えることで学校は活気づいています。今春卒業の1期生からは国立大学合格者も出ました。私の赴任と前後して看護科や福祉科が募集停止となったのは残念ですが、それを乗り越え新しい風が吹き始めています。

よしだ・しんご / 1958年生まれ。法政大学社会学部卒業。松山市内の小中学校の教員を経て、松山市教育委員会指導主事、中学校教頭、小学校校長(併設幼稚園長)、愛媛県教育委員会義務教育課長、同指導部長、松山市立桑原中学校長。2021年より松山学院高校副校長。2022年より現職。愛媛大学大学院客員教授(2019年～2024年)。